

[中国の絵画展によせて]

閻相師像(紫光閣功臣像の一つ)

中国・清時代 乾隆25年(1760)作
絹本着色 187.4×96.2cm(賛とも)

本図は今年度の新収品で、中国清時代の武人肖像画です。画の上部に別絹の墨書が付され、そこに「領隊大臣甘州提督閻(閻)相師」という像主の名前が記されています。この絹の中央上端には「乾隆御覽之宝」の楕円印が捺され、右半分に漢文、左に満州文字を配しており、清朝宮廷の公的な絵画であることがわかります。

賛は像主の官位名前に続いて功績を大書し、最後に乾隆庚辰春に廷臣劉統勳(1699-1773年)・劉綸(1711-73年)・于敏中(1714-79年)の三名が勅命を承けて着賛したことを記しています。乾隆庚辰は乾隆25年(1760年)にあたり、画もこの時の制作でしょう。

閻相師について、この賛文は、「車庫(新疆省)を攻めて、その城門に迫った時、石が顔に当たったけれども一歩も動かなかったため、これを見た人々は驚嘆した。葉爾羌(新疆省)の戦いでは敵の隙を突き、要害を排撃した。その姿は雄偉で、函谷関以西の叛乱を鎮めるのに足るものであった。」と簡単に述べています。閻の字は閻と同じで各種の文献は閻相師と表記しているのもここでも閻相師と表記することにします。

さらに、『清史稿』の伝(巻316)によつて伝記を補うと、彼は高台(甘肅省)出身の漢族で、軍隊に入って昇進を重ね、準噶爾部を討った時、雪で迷ったふりをして敵陣に入り込み、兵五百をもって敵方四千人を殲滅させるという功績を挙げました。ついで回族の平定でも功があり、花翎を賜りました。花翎とは、孔雀の羽根で作った装飾のことで、清朝では特に軍功のあるものがその榮譽に浴しました。この図の帽子の後に付いているのがそれです。

ついで回族の叛乱鎮圧に参加し、

領隊大臣を授かりました。この時に敵の拠点車庫を包囲し、額に石を受け傷を負うという事件が起きたようです。その掃蕩作戦に成功し、安西提督、次いで甘肅提督を授かりました。やがて都に凱旋し、皇帝に拝謁を許され、銀貨を賜り、その姿が絵に写され、紫光閣に掲げられました。

また、閻相師は武人として勇荘なだけでなく、生まれつき善良な性質で、親や兄弟思いでした。また、自分の居所には灌漑を整備し数百戸がその恩恵を蒙りました。没後、太子太保を遺贈され、相贈の諡を賜りました。

その紫光閣に掲げられた閻相師像がこの画です。閻相師は花翎を後に垂らした帽子を戴き、鎖帷子(かたびら)を着、腰に刀と弓および矢を入れた鞞(うつば)を帯び、左を向いて威儀を正しています。肩間にある傷痕は車庫での武勇談の証でしょうか。洗練された乾隆朝の宮廷絵画らしい、衣裳の鮮やかな彩色と西洋画を思わせる写実的な面貌表現が印象的な肖像画です。

ところで紫光閣は紫禁城西側の西苑内にあり、太液池の西岸に位置します。もともと紫光閣は皇帝が軍隊を接見する場所でしたが、西域を平定したことを記念して、乾隆25年(1760年)に新たに殿閣が建てられ、中に武勲ある百名の肖像画と十六場面の戦闘図を掲げました。その落成の祝宴は翌年の正月に行われ、以後新年恒例の行事となりました。北京の故宫博物院に画院画家の姚文瀚がこの式典を描いた紫光閣賜宴図巻が残っており、その有様を知ることができます。

この儀式的目的は、辺境の降伏者たちに清朝の武力がいかに強大であるかを見せつけることにありました。ですからそこで必要とさ

れた絵画も、皇帝の意向を反映して、また殿閣に釣り合うように巨大で壮麗なものとなりました。

もと幅幅あったこの紫光閣功臣像は、現在、本図の他にベルリンの東アジア美術館に3幅、またニューヨークのメトロポリタン美術館に1幅所在することが確認されており、今後新たに見つかる可能性もあります。

さて、この肖像画の画風上の特色は、その写実的な面貌表現にあります。体軀や武具などは、明確な輪郭線で括り、弱い陰影しか付けない伝統的な中国画法で描かれていますが、閻相師の顔には西洋絵画のような克明な陰影法が施され異彩を放っています。

こうした画法はイエズス会士の画家によって清朝に齎らされたもので、この画の作者も郎世寧と伝えられています。郎世寧(1688-1766年)は、ジュゼッペ・カスティリオーネ(Giuseppe Castiglione)の漢名で、イタリアのミラノ生まれのイエズス会士ですが、康熙54年(1715)に来朝し、乾隆31年に北京で没するまで宮廷画家として活躍しました。

乾隆朝の西洋人画家は他に、フランス人の王致誠(ジャン・ドニ・アッチレ/1702-68年)や、ポヘミア出身の艾啓蒙(イグナティウス・ジッヘルバルト/1708-80年)などがいます。彼等は画家として乾隆帝の寵愛を受けましたが、中国に渡ってきた目的はキリスト教の布教にあり、いわば方便として皇帝の歓心を買った家臣として作画に従事したのであり、宮廷画家としての活動は必ずしも彼等の本意ではありませんでした。

彼等は中国絵画の主要ジャンルの山水・花鳥・人物いずれも手掛けたましたが、乾隆皇帝がその写実的画風をとりわけ評価したのは肖

像画と画馬(馬の絵)で、乾隆帝は郎世寧に自分の肖像画を描かせたり、また種々の駿馬図や辺境を征討したときの戦闘図あるいは宮廷の式典図の制作を西洋人画家にたびたび命じています。それらは巨大な画面に多数の人物が集い、その顔かたちが細部に至るまで克明に描かれたものであったり、本図のように複数の図から成る大作が多く、そうしたものは複数の画家が共同制作するのが普通でした。

ですから、この閻相師像の制作でも、文献の裏付けはありませんが、顔の部分は郎世寧らの西洋人画家が担当し、他は別のおそらく中国人の画家が描いていると考えられます。(藤田伸也)



季刊 美のたより No.101

平成4年11月13日

発行 大和文華館